

茶道と聖書 ④

金継ぎとは

「金継ぎ」とは、割れた茶碗や花器などを修復する日本古来の技法である。室町時代からあったらしいが、茶碗などを使用する茶道とは深い関わりがある。

金継ぎには漆を使用する。漆は、強力な接着力とコーティング力を持ち、日本最古の漆器は、なんと七千年前から使われているものらしい。ペンキなどの塗料とは比較にならないほどの耐久性を持つ。

この漆を接着剤にして破片をつなぎ、その表面に金粉をかけるのが金継ぎである。

それにしても不思議な技法である。普通、傷というものは隠すものだ。絵画の修復や建造物の修復などは傷があったことが分からないように見事に元の姿を回復させる。

しかし金継ぎは、あえてその傷を見せるのだ。金粉をまぶすことで、傷を隠すどころか逆に目立たせるのだ。しかも、金が施されることで、それが茶碗の新しい魅力となり、傷つく前よりもさらに深い味わいのある茶碗となる。

金継ぎは、愛

私は、この金継ぎに、愛を感じてしまう。聖書によれば、私たち人間は神に造られた者たちである。得体の知れない物からたまに偶然に進化したものではなく、人間は人間として、あなたはあなたとして神に造られたのだ。私たちの存在は偶然ではなく、必然である。だからその存在には意味があると言ることができるのだ。

しかも神が造ったのだから、その存在は最高傑作品であり、いわゆる失敗作というもの一つも存在しない。私たちは、最高にして唯一の価値ある一人ひとりなのだ。

しかし、その最高傑作品である私たちが、その価値にふさわしくない評価、使われ方をしてしまうことがある。

ある人間国宝が作った作品が、人手に渡るうちに作者が分からなくなり、しまいには、埃をかぶって置かれていたり、物入れにされたり、灰皿に使われたりして、本来の価値にふさわしくない状態になってしまったとする。だからと言って、この作品の価値は



変わらない。その作者が自分の造った作品が灰皿に使われているのを見たら悲しむだろう。しかし、それでその作品を捨てるだろうか、いやむしろ作品を買い戻して、綺麗に洗って、傷ついていたら金継ぎをして、自分のものとして修復するだろう。どんな状態になっても、自分の作品である以上、その価値は変わらないのだから。

同じように、私たちを造られた神にとっては、私たちがどんな状態になったとしても、たとえ、欠けて、ひびが入って、傷ついてしまっても、その価値は変わらない。神は決して私たちを見捨てることはされないのだ。そこには作者の作品に対する愛がある。

傷が傷跡へ

私たちは人生において、様々に傷つけら

れることがある。その心の傷の痛みは、悲しみや怒り、失望として感じられる。普段、私たちは、傷の痛みを隠しながら、元気で明るい振りをする。あるいは正反對に、その痛みを他人や社会に向かって発散して心のバランスを取ろうとする人もいる。傷の痛みを内側に抑えれば自分自身がさらに傷つく。逆に外側に発散させれば他人を傷つけることになる。いずれにしても、誰かがさらに傷つくことになる。

しかし、もしその傷が癒やされたら、その傷は傷跡となり、金継ぎのようにその人の人生に深みと豊かさを与え、その人の新しい魅力となる。傷が痛みのまま残るのか、それとも金継ぎのような傷跡となるのか、それは大きな違いとなる。

どうしたら傷が癒やされるのか？その傷ついた自分が、神に愛されていることを知ることだ。神の愛は、まるで金粉のように、私たちの傷を金色に輝く新しい魅力に変えてくださるのだ。

読んでみよう

BIBLE
WORD

ペテロの第一の手紙
2章24節(新約聖書)

